

最上義光花押再考

令和二年（二〇二〇）二月

山形大学紀要（人文科学）第十九卷第三号別刷

松尾剛次

（山形大学名誉教授）

# 最上義光花押再考

松尾 剛次

(山形大学名誉教授)

はじめに

最上義光は、奥羽の戦国大名の一人で、江戸時代には五七万石の山形藩初代藩主である。本稿の主な狙いは義光の花押変化について考察することである。

花押とはサインのことで、個人の同定や年付の書かれていない文書、いわゆる年欠文書の年代比定などにおいて大いに重要視されている<sup>\*1</sup>。

近年の最上義光研究の進展により、三百点を超える最上義光が発給した文書が見つかっている。しかしながら、年欠文書も多く、それらの年代比定において、花押編年分析は極めて有効であることは言うまでもない。

最上義光の花押については、つとに『山形市史料編1最上氏関係史料<sup>\*2</sup>』（武田喜八郎担当部分、以下『山形市史』と略す）で論じられたが、収集された文書も少なく、基礎的研究と評価できる。また、安部俊治「花押に見る最上氏の領主としての性格」<sup>\*3</sup>において、

て、後述するA型花押を中心に義光花押に関する研究を行っている。筆者も「最上義光文書の古文書学 判物・印判状・書状<sup>\*4</sup>」、「『家康に天下を獲らせた男 最上義光<sup>\*5</sup>』で論じた。

それらは、貴重な成果といえるが、最上義光研究の進んだ現在、花押年代の比定などに関して問題がないわけではない。たとえば、安部氏のA型花押の編年に関しては、花押年代の比定に関して大きな問題がある。武田氏のC型花押分析についても、収集された資料が少ないこともあって、C型のC1型からC2型への変化の指摘だけに止まり、なぜそうした変化が起こったのかについての分析はない。そこで、ここでは、義光花押について再考する。

## 第一章 義光A型花押

ここでは、表のように、花押の据えられた最上義光文書六四例を対象にする。最上義光の花押については、図のような、A型からE型の五種類あることが指摘されている。ただし、D型とE型は、本文で後述するように、花押類型として立てるべきか大いに疑問があり、筆者は立てるべきではないと考える。理由は後述する。

また、たとえばC型はC1、C2型に細分する見解も出されている<sup>\*6</sup>。筆者はすべての史料の原本調査を試みたが、『山形市史』、

『山形県史古代中世史料1資料編15上・下』編纂の時点では原本が見られたのに、散逸してしまつて現在では見ることができない、さらには写真すらないものもある。それについては、表では、C1、C2のような細分化をせず、ただC型と記している場合があることを断っておきたい。また、『山形県史』などで花押影があるとされるが、現史料などを見られなかったものはFとした。

図(1) A型

① A1型



永禄 13 (1570) 年 1月吉日付  
最上義光言上状  
(表No. 1)

② A2型



天 正10 (1582) 年8月7日付  
最上義光書状  
(表No. 6)



天正18 (1590) 年 7月4日付  
最上義光 書状  
(表No. 11)

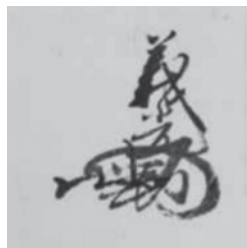
図(2) B型



天正20 (1592) 年3月28日付  
最上義光 書状  
(表No. 15)

図(3) C型

① C1型



慶長 3 (1598) 年8月2日付  
最上義光禁制  
(表No. 21)

② C2型



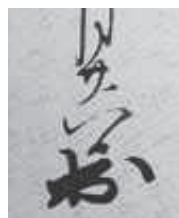
<慶長末?>3月27日付  
最上義光書状写  
(表No. 39)

図(4) D型



天 正20(1592)年3月28日付  
最上義光書状  
(表No. 16)

図(5) E型



年未詳12月28日付  
最上義光書状写  
典拠は後述

まずA型花押についてみよう。A型花押に関しては、永禄一三(一五七〇)年正月吉日付の「最上義光言上状」△図(1)の①▽が史料上の初見である。花押の最大縦幅は三・一センチメートル、横の最大幅は四・七センチメートルである。義光は、永禄三(一五六〇)年正月に一五歳で元服したと考えられる。ので、その頃から花押を使い始めたはずで、その花押はA型であったと考えられる。義の字をサイン化したと考えられる。

A型花押に関して、安部氏は(一)元亀三(一五七二)年から天正一八(一五九〇)年まで使用されたものは、ほとんど同じ形態と言って良い、(二)花押の細部の変化は、自筆花押と版刻花押型(花押印)の相違による差で、(三)その花押には、義光が「出羽国之御所」として、天正一六(一五八八)年以降は秀吉政権のもとで「山形出羽守」としての義光の立場が表れているとする。

まず、(一)について。A型花押に関しては、従来、指摘されてい

最上義光花押再考

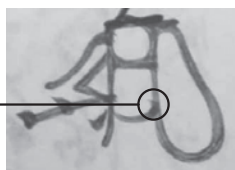
ないが、A1型とA2型の二型があったことは明らかである。図

(1)の二つのA型花押を見比べると、相違に気づく。

A型花押を中央部の三区画の部分と、右部の象の鼻のような部分と、左部の部分に分けてみると、中央部の一番下が、A2型では湾曲しているのに、A1型ではしていない。左部も、A2型では下方の横棒に点が二つがあるのに、A1型では二つの点はない。そうした相違は、自筆花押と花押印の差ではないであろう。とりわけ、大きな相違である二つの点については、花押印でも点を二つ加えれば良いはずだからだ。それゆえ、相違点に注目して二型に分類した。

A1型は、初期の花押であるためか、先述の永禄一三(一五七〇)年正月吉日付の「最上義光言上状」一例しか現存していないが、永禄三(一五六〇)年の元服以来、使用していた可能性は大いにある。今後の発見に期待したい。

それではA2型は、いつから使用されたのであろうか。このことを考えるうえで、次の図(6)の花押は参考になる。



図(6)  
元亀3(1572)年3月17日付  
最上義光知行宛行状写  
(表No2)

残画

図（6）は、元龜三（一五七二）年三月一七日付萩生田宛最上義光知行宛行状写<sup>10</sup>に据えられた義光花押である。それによれば、中央部の格子の部分、三区画ではなく、二区画に見えるが、残画から三区画であった可能性がある。本文書は、秋田藩家蔵文書の写しか残っていないが、秋田藩家蔵文書はよくできた写である。その花押はほぼA2型であり、その頃にはA2型の使用されていたと考えられる。以後、例外はあるが、ひとまず天正一八（一五九〇）年までA2型花押は使用される。

ところで、A型花押については、安部氏が「出羽国之御所山形殿」としての義光を象徴する花押<sup>11</sup>とする。確かに、最上義光は「出羽国之御所山形殿」であり、A1型花押は、そうした意識を表していると考えられる。しかし、A1型からA2型へ変化したのは、なぜであろうか。



図（7）  
足利義昭の武家様花押Ⅱ



図（8）  
足利義輝花押V

図（7）は足利義昭の「武家様花押Ⅱ」<sup>12</sup>、図（8）は「足利義

輝花押V」<sup>13</sup>である。いずれも、義光のA2型花押のように横に点がついている。それゆえ、A2型への変化は、「出羽国之御所山形殿」を超えた、足利將軍家の一族斯波の一族であることを象徴していると考ええる。より言うならば、天正一六（一五八八）年には、「羽州探題」<sup>14</sup>であったことを考えれば、羽州探題職の継承者を意識した<sup>15</sup>と考える。

安部氏は、図（7）の足利義昭の花押とよく似ているとされる<sup>16</sup>。というのも、現存するA1型花押が据えられた永禄一三（一五七〇）年正月吉日付の文書をもって初めてA型花押が使用されたと考えたからであろう。しかしながら、義光が元服して花押を使い始め永禄三（一五六〇）年の頃の將軍は足利義輝であり、ひとまず、義輝の花押をモデルとしたと考えたい。実際、図（8）の永禄二（一五五九）年の足利義輝花押と似ている<sup>17</sup>。

ところで、安部氏は、A型花押の実例一二例を挙げて花押の編年を試みている。しかし、安部氏の花押編年に関して大いに異論がないわけではない。そこで、以下で分析を加えるが、その際、写ではなく原史料に据えられた花押八例に注目する。

A1型花押は、先述の永禄二三（一五七〇）年正月吉日付の「最上義光言上状」一例しか現存していないが、年付があるので全く異論はない。

他方、A2型花押に関する安部氏の花押年代比定に関しては問題がある。そこで、以下で考察する。安部説で、A2型花押が据えられた最初とされる文書は、次の義光書状である。

#### 史料(一)\*<sup>18</sup>

先達者申述候処ニ細碎之御報、祝着無他事候、仍鮭延到頃日弥々逼迫之躰、為申上候条、深々歎ケ敷候、如何共及戦法度迄候、随而南口之儀、従田村為籌策、今五日一事も無題目無事落着候、雖然去春則候、号中山要害、于今不取置候之条、尚々細點をも稠申付無油断候、併鮭之事、難捨候間、予一騎も可出張候歟、此堺於御手透者、自以前之云御首尾、有御進発、庭月被引廻可然候(中略)恐々謹言、八月七日 義光(花押)

大崎殿(義隆)

史料(一)は、年末詳八月七日付、大崎義隆宛最上義光書状である。内容は、庄内の領主大宝寺義氏の攻勢を受け、真室川の領主で最上義光配下の鮭延秀綱は劣勢に立たされていた。だが、義光は中山要害(現、中山町力<sup>19</sup>)攻撃で手が外せず、援軍を出せない情勢にあった。そこで、奥州の有力領主で、妻の兄であった大崎義隆に援軍を要請したのがこの手紙である。

#### 最上義光花押再考

安部氏は、本文書の年代比定を天正五(一五七七)年とする<sup>20</sup>。しかしながら、鮭延秀綱が義光の配下に入るのは天正九(一五八一)年以降と考えられている<sup>21</sup>。また、「南口之儀」すなわち佐竹・田村・葦名三氏の和合がなつたのは、天正一〇(一五八二)年と考えられ<sup>22</sup>、天正一〇(一五八二)年の文書であらう。

安部説で、A2型花押が据えられた第二番目の文書は、年末詳一月二五日付下国愛季宛最上義光書状である。

#### 史料(二)\*<sup>23</sup>

如翰竹之未令啓書候処ニ、急度之御到来祝着之至候、随而這般鮭延へ従庄中致乱入候之条、彼口為引立之勸騎之支度候キ、然処ニ、白岩八郎四郎大宝寺方へ以縁約之首尾、企別心候之条、為退治向彼地令発向候、先々属本意之形候、到春中者清水・鮭延以相談、庄中可押詰候、雖無申迄候、於其時者、為引汲三庄境目へ可被責入事肝要候、毎事砂宗入道方へ及細書候条、不能腐毫候、恐々謹言

霜月廿五日

源義光(花押)

謹上 下国殿

内容は、庄中すなわち大宝寺義氏が鮭延を攻めてきたので、その援軍を送る準備中に、白岩八郎四郎廣隆が大宝寺との縁約があり、

別心を企てたので、退治に向かい、打倒したことなどを伝えている。

安部説は、「安中坊系図」では、白岩八郎四郎廣隆が天正五（一五七七）年に義光の弟松根に殺されたとする<sup>24</sup>ので、史料（二）を天正五年の文書とする<sup>25</sup>。

しかしながら、先述のように鮭延が、義光の配下に入るのは、天正九（一五八一）年以降である。また、大宝寺義氏が拡張政策を採るのは天正一〇年ころ<sup>26</sup>で、従来、本文書の年付は、天正一〇（一五八二）年と考えられている<sup>27</sup>。それゆえ、私も、ひとまず天正一〇年の文書と考える。

安部氏がA2型花押が据えられた第三番目とするのは、天正七（一五七九）年八月二八日付湯殿山宛最上義光起請文である。この文書は年付があるので異論はない。

安部氏がA2型花押が据えられた第四番目の文書とするのは、年未詳五月一三日付最上義光書状である。

### 史料（三）<sup>28</sup>

如承候、（中略）然而爰元之様子、追々敵軍押詰得勝利候、可被心易候、將亦従前々東根へ御懇切候之旨趣申理候、如何様之有子細、我々致等閑候与可被思召候、去年春中以來、於天童日々城拵仕、其上号高嶺地可懸捕内評令現形候之間、即口惜之段申候之處、従東根

頼息代別而奉公仕候、其筋目引替、天童へ致候一味候事、無是非次第候、依之於此度者、彼面も可加退治之旨、令逼塞候、我々以邪儀如此二者聊無之候、何様自是以飛脚可申述候之間、早々、恐々謹言、追啓、自砂金駿河方、中山新介處ニ書中令内見候、自天童東根様へ申寄、雖子細候、我々處へ者以首尾不通ニ被仰弘之由誠ニ御心事深々大慶之至候、此等之儀、如何様急度以飛脚可申述候、

五月十三日 義光（花押）

高森殿  
留守政盛

安部氏は、本文書を天正九（一五八一）年の文書とする。内容は、天童氏が城堅めをするなど、もはや天童攻撃必死となった状況下、天童とともに東根氏も攻撃する予定である旨を留守政景に伝えたものである。それゆえ、おそらく、天正一二（一五八四）年の義光による天童攻撃の頃の文書であろう。

安部氏がA2型花押が据えられた第五番目の文書とするのは、次の年未詳七月二九日付最上義光書状である。

### 史料（四）<sup>29</sup>

（前欠）中之儀、無心許候条、及重使候、尤頃日之有長陳、苦勞□□間、入馬之上、定（而）昼夜□覽令推察候、併境目ニ番懇被仰付之



由、其听御大儀至極候、雖無申迄候、諸口尚堅固之賦肝要第一二候、隨而当表兵革、到近日、田畠共作毛悉難捨、終不為開木戸、取詰候、此上者、不経日数可退治見当等も雖有之、勇兵可相失者、徒事候之間、先々取延候、乍去、無幾程可押倒候、別而床敷不可思召候、諸毎小関伊豆守可申披候条、不能細書候、恐々謹言、(中略)

七月廿九日 義光(花押)

(宛所抹消)

安部氏は「義光」の署名の筆跡は七得印の押された天正九(一五八一)年九月一二日付判物のそれと近く、本文書をその頃のものとする。しかしながら、本文書は、文頭部分が欠けていて内容が取りづらいうえに、宛所が故意に消されているため、年代を確定できない<sup>30</sup>ので、判断を保留せざるをえない。

以上述べてきたように、安部氏の花押年代比定には問題がある。そこで、以上の分析を踏まえて、花押を年代順に並べると以下のようになる。

図(9)は、天正七(一五七九)年八月二八日付湯殿山宛最上義光起請文<sup>31</sup>に据えられた花押で、これが、年付から、現時点における確実にもっとも古いA2型花押である。この花押は、安部氏によれば、版刻花押とする<sup>32</sup>。本起請文は、義光の病氣平癒祈禱感謝の

最上義光花押再考



図(9)  
天正7(1579)年8月28日付  
最上義光起請文  
(表No.3)

内容であり、それ以前に、義光は重篤な病氣であつたことがわかる。義光は花押も書けない状況だったのであろう。



図(10)  
天正10(1582)年8月7日付  
最上義光書状  
(表No.6)

図(10)は先に史料(1)として論じた天正一〇(一五八二)年八月七日付大崎義隆宛最上義光書状で、花押は自筆花押と考えられている。花押は大ぶりで、最大高四・三センチメートル、最大幅六・二センチメートルもある。



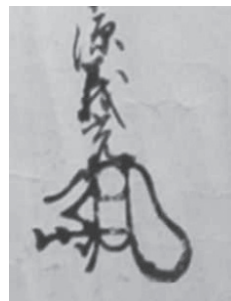


図 (11)  
天正10 (1582) 年11月25日付  
最上義光書状  
(表No.7)

図 (11) は、先に史料 (2) として分析した天正一〇 (一五八二) 年一月二五日付下国愛季宛最上義光書状である。原史料ではないが、東大史料影写本では、花押の最大縦高は四センチメートル、最大横幅は五センチメートルである。

図 (10) と図 (11) は、同じ天正一〇 (一五八二) 年に出された文書なのに、花押の横棒に付けられた二つの点の位置が異なっている。しかも、図 (11) は、図 (9) と似ている。安部氏は図 (12) も版刻花押とする。<sup>33</sup> が、おそらくそうであろう。すなわち、A2型花押には自筆花押と版刻花押があり、相違は、それによると考えられる。

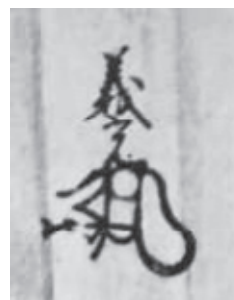


図 (12)  
天正12 (1584) 年5月13日付  
最上義光書状  
(表No.9)

図 (12) は、先述した天正一二 (一五八四) 年五月一三日付留守政景宛最上義光書状に押された花押である。

本花押は、図 (11) の花押と類似しており、安部氏の指摘のように、おそらく版刻花押であろう。<sup>34</sup>

ところで、A2型花押は、以後も使われるが、いつまで使用されたのであろうか。そのことを考えるうえで、注目されるのは、史料 (5) の天正一八 (一五九〇) 年七月四日付浅野長政宛最上義光書状に押された図 (13) の花押である。



図 (13)  
天正18 (1590) 年7月4日付  
最上義光書状  
(表No.11)

史料(五) \* 35

(前略)先達者及音通候處、御懇答祝着至候、然者此元へ參着、無時刻、家康以御取成、遂出仕候之處ニ、何ニモ御懇ニ被懸御意候つ、此上之事者、累年之宿望与申、京都へ之御奉公相動申度之願迄候、乍去只今之拙者不肖之進退ニてハ、重而上洛之儀難叶段、佗言千萬候、此等之旨、我等罷越雖可申述候、先々以使札及理候、家康へ御相談を以、拙身上一途於預引立者、從最前之御懇切之筋目与申、一段忝可畏入候、委曲新關次兵衛尉口裡相含候之間、定可爲才覺候歟事候、恐々謹言、

山形出羽守

(天正十八年)  
七月四日

義光(花押)

淺野彈正少弼殿

御陣所

史料(五)は、年付がないが、最上義光が徳川家康を仲介者として、豊臣秀吉の配下に入る仕事を伝える内容であり、秀吉が天下統一した天正一八(一五九〇)年の文書と考えられてきた。筆者も天正一八年の文書と考える。ここで注目されるのは、義光は図(13)のように、A2型花押を使用している点である。図は、東大史料編

最上義光花押再考

纂所影写本であり、版刻か自筆かを判断できない、ただし、花押の最大高は四センチメートル、最大幅は五・二センチメートルであり、ほぼ版刻花押と同じ大きさであり、版刻花押かもしれない。とはいえず、よくできた影写本であり、A2型の花押であることは間違いないであろう。とすれば、義光はA2型花押を天正一八年まで使用しつづけたことになる。

ところが、天正一九(一五九二)年になると、全く異なる図(14)のような、B型花押を使い始める。



図(14)  
天正19(1591)年5月3日付  
最上義光書状  
(表No.13)

図(14)の花押は、天正一九(一五九二)年五月三日付某宛最上義光書状<sup>36</sup>である。年付がないが、内容は天正一九年の九戸一揆討伐など、奥州再仕置に關しての豊臣秀次の奥州出馬予定などが書かれており、天正一九年のものであるろう。とすれば、A2型に変わって、B型花押を使い出したといえる。

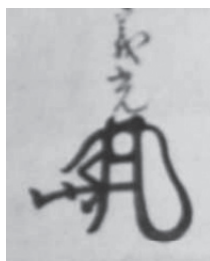
以後、後述のごとく、慶長八年、慶長一五年、慶長一七年に例外

的にA2型花押を使用する場合があるが、基本的にはB型など異なる花押使用に変化してゆく。

以上、最上義光のA型花押には、A1型とA2型の二パターンがあり、さらにA2型には自筆型と版刻型の二つがあったことが明らかとなった。

ところで、A2型は、義光がC型などを使うようになった慶長期においても使用する。この点については、『山形県史<sup>37)</sup>』が、それらの文書を偽文書と疑った。その上、花押分析を行った安部氏も偽文書とする<sup>38)</sup>。

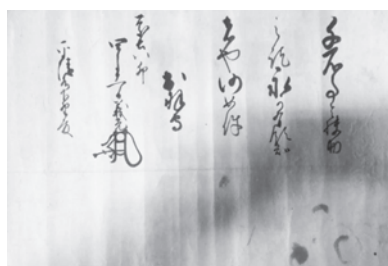
たしかに、現在平清水家にある文書は、紙質などが疑わしいし、花押も図(15)のように、A2型とは異なっており、大いに疑わしい<sup>39)</sup>。



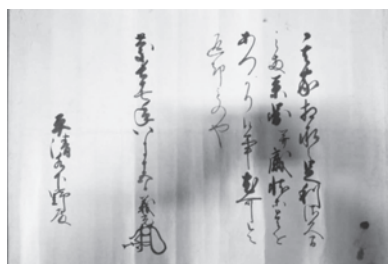
図(15)  
慶長8(1603)年4月11日付  
最上義光知行宛行状  
(表No.42)

ところが、筆者が二〇一八年に山形市内の個人宅で見いだした慶長八年四月一日付平清水下野守宛最上義光文書ハ図(16)✓と慶

長一七年八月一五日付平清水下野守宛最上義光借用状、ハ図(17)✓には、A2型が据えられ、その花押の最大高は四・三センチメートル、最大横幅は六・三センチメートルと大ぶりで、図(10)の自筆花押とはほぼ同じ大きさである。



図(16)  
慶長8(1603)年4月11日付  
最上義光知行宛行状  
(表No.42)



図(17)  
慶長17年8月15日付  
最上義光借用状  
(表No.5)

それゆえ、それらの文書をただちには偽文書とは言いがたい。とすれば、ひとまず義光によって、平清水氏に対しては慶長期にA2型の文書が出されたと考えるべきであろう。

では何故に義光はA2型を据えたのであろうか。理由は明確ではないが、やはり文書をもらった平清水下野が鍵となる。

平清水下野氏は、第一五代將軍足利義昭の子どもであったという。それゆえ、最上義光は、平清水下野を重視していたようである。

「最上義光分限帳」によれば、三〇〇〇石の石高をいただいていた<sup>40</sup>。それゆえ、平清水氏には義光は足利氏系の花押であるA2型を使用したと考えておこう。こうしたケースの存在は、花押編年を考える際に注意すべき事例といえよう。

## 第二章 A型以外の花押

前章で述べたように例外はあるが、A2型の使用は、天正一八（一五九〇）年をもってひとまず停止したと考えられる。というのも、A型は、足利將軍家の花押をモデルとしたものであり、豊臣政権の成立にともない、義光は花押を変えた。すなわち、B型の使用開始である。

### B型花押

B型は、先述の天正一九（一五九二）年五月三日付某宛最上義光書状に据えられた花押△図（14）▽を初見とし、文禄四（一五九五）年まで使用が確認できる。

B型花押は、「出羽」を元にした花押と推測され、豊臣政権下の出羽の支配者としての意識を表しているのであろう。C型花押のもとになったと考えられている<sup>41</sup>。

### 最上義光花押再考

武田氏は、B型花押については、残存例が少ないとされ、花押分析はさほどなされていない。ただ、B1型△図（18）▽、B2型△図（20）▽の二型があったとされる<sup>42</sup>。確かにB型花押の文書は多くはないが、幸いに年付のある文書が多く、天正一八（一五九〇）年から文禄四（一五九五）年まで毎年の花押を追うことができる。

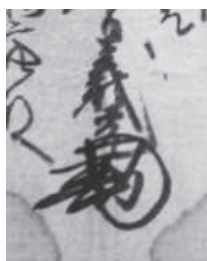


図 (18)  
天正20(1592)年3月28日付  
最上義光書状  
(表No15)

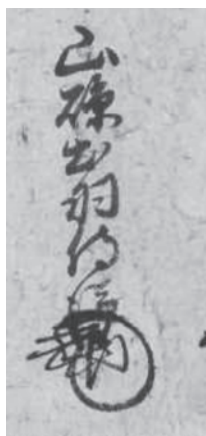


図 (19)  
文禄2(1593)年5月20日付  
最上義光等20名連署状  
(表No17)

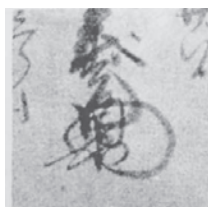


図 (20)  
文禄3(1594)年1月28日付  
最上義光知行宛行状  
(表No18)



図 (21)  
文禄4(1595)年7月20日  
最上義光等30名連署起請文  
(表No19)

図を見れば、筆の運びに違いが見られるが、基本的に「出羽」と書いているように見える。ただ、毎年少し変わっているが、先述のように、武田氏は、図（18）をB1型とし、図（20）をB2型とする。筆の運びに注目すると、図（18）と図（19）にも相違があるが、新たな型を立てるべきかは、今後の史料の発見に期待しよう。

### C型花押

C型花押は、管見の限りでは図（3）①を初見とする。図（3）①は、慶長三（一五九八）年八月三日付専称寺宛最上義光禁制<sup>43</sup>に書かれた花押である。

C型花押は、慶長期に使用された。C型花押に関しては、武田氏によって先述の図（3）①のようなC1型から、図（3）②のようなC2型へと変化していくと考えられている。

すなわち、慶長五（一六〇〇）・六（一六〇一）年頃までは腰高の肥った猪に似た形であるが、それ以後は段々腰が低くなり、遂にはねそべった猪の如きスタイルになってしまう<sup>44</sup>、いう。

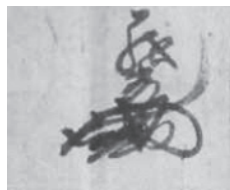


図（3）①  
①慶長3(1598)年8月2日付  
最上義光禁制  
(表No.21)

引用した花押の変化からも、確かに、そうした変化の事実を読み取ることができる。しかし、武田氏は、そうした変化の意味につい



図（26）  
年未詳10月14日付  
最上義光書状  
(表No.36)



図（24）  
慶長9(1604)年閏8月2日付  
最上義光書状  
(表No.43)



図（22）  
慶長5(1600)年11月8日付  
最上義光書状  
(表No.31)



図（25）  
慶長11(1606)年2月7日付  
最上義光書状  
(表No.45)



図（23）  
慶長7(1602)年7月23日付  
最上義光知行宛行状  
(表No.33)

では一切述べられていない。

この点を考えるうえで、そうした変化が起こった時期は重要である。というのも、まさにその時期は、慶長五（一六〇〇）年九月一五日の関ヶ原合戦と、それと連動して、最上義光は家康方に味方して慶長出羽合戦を戦い、直江兼統率いる上杉勢に勝利したからである。その結果、最上義光は慶長六年には二〇万石の豊臣大名から五七万石の徳川方大名となったのである。こうした重要な身分変化こそが花押変化の背景であろう。

### D型花押

D型花押は、図（4）のような、文禄二（一五九三）年五月一八日付最上義光書状写のみに見える花押である。武田氏は、きちんとした写と判断して、D型花押を立てた。しかし、当時はB型花押の時期である。さらに、原史料ではない写であり<sup>46</sup>、D型を立てるべきか大いに疑問である。そこで、本稿では、ひとまずD型花押を立てないことにする。

### E型花押

E型花押は、図（5）のような、「出」の文字である。この文字は、図（27）<sup>46</sup>、実は図（5）の下部の部分も含めた図<sup>47</sup>、図（28）

のように印判とともに使用されることがある<sup>47</sup>。それゆえ、花押というより、出羽守を略したとすべきであろう。なお、図（28）は、秋田藩家蔵文書の一つで、原本ではなく、写である。



図（27）  
年未詳12月28日付  
最上義光書状写



図（28）  
年未詳11月21日付  
最上義光書状

以上の理由から、D、E両型花押はひとまず花押型からはずして考える。

### おわりに

以上、本稿では最上義光の花押変化に注目し、A型からC型の型の存在を明らかにした。また、A型にはA1型とA2型の存在を明らかにした。また、C型に関しても、C1型からC2型への変化



の背景に、最上義光が関ヶ原の戦い後の慶長六（一六〇一）年に二〇万石の豊臣大名から五七万石の徳川方大名となるという身分変化などを指摘した。

こうした成果を踏まえてみると、おおその花押年代を比定できる。たとえば、図（26）の文書は、年付がないが、慶長一六（一六一）年一〇月一四日付小国撰津守宛最上義光書状とされてきた。すなわち、義光晩年の花押とされてきた。しかし、花押から見れば、図（23）、図（24）の花押によく似ており、おそらく、慶長七（一六〇二）〜九（一六〇四）年ころの花押であろう。以上のように、花押の編年分析は、欠年文書の年代比定に有効な場合があることを確認して本稿を終えよう。

注

- \* 1 花押の研究および研究史などについては、佐藤進一『花押を読む』（平凡社、二〇〇〇）、上島有『中世花押の謎を解く 足利將軍家とその花押』（山川出版社、二〇〇四）など参照。なお、伊達政宗の花押については石田悦夫「伊達政宗の花押変遷」（『東北学院大学東北文化研究所紀要第二十二号』一九八二）、上杉謙信の花押については前嶋敏「越後文書宝翰集における上杉謙信署判文書」（矢田俊文編『室町・戦国・近世初期の上杉氏史料の帰納的研究』、新潟大学人文学部、二〇〇六）など参照。

- \* 2 『山形市史史料編1最上氏関係史料』（山形市、一九七三、以下、『山形市史』と略す）四四頁など。後に『武田喜八郎著作集 巻1 山形県文化史の諸研究』（小松印刷、二〇〇七）に加筆の上で採録されている。

- \* 3 安部俊治「花押に見る最上氏の領主としての性格」（伊藤清郎編『最上氏と出羽の歴史』高志書院、二〇一四）。

- \* 4 松尾剛次「最上義光文書の古文書学 判物・印判状・書状」（山形大学大学院社会文化システム研究科紀要 一一、二〇一四）。

- \* 5 松尾「家康に天下を獲らせた男 最上義光」（柏書房、二〇一六）。

- \* 6 『武田喜八郎著作集 巻1 山形県文化史の諸研究』（前注（5））一七九〜一八二頁。武田氏は典拠などを明記していない場合もあるために、すべての文書を一から再調査せざるを得なかった。また、所有者が代わっていたり、散逸している、残念ながら、すべての最上義光文書の原本調査ができなかった。

- \* 「最上義光文書表」の花押欄でFと記したのは、花押が据えられていることはわかっているが、どの型なのかわからないものである。

- \* 7 『山形県史古代中世史料1資料編15上』（山形県、一九七七、以下『山形県史上』と略す）、『山形県史古代中世史料2資料編15下』（山形県、一九七九）。

- \* 8 『山形市史』（前注（2））の口絵に写真がある。平成三一（二〇一九）年四月二五日に原史料調査を行った。その際、立石寺住職清原氏のご協力を得た。

- \* 9 松尾「家康に天下を獲らせた男 最上義光」（前注（5））。

- \* 10 『山形市史』（前注（2））二三八頁、『秋田藩家蔵文書』（A280-89-13-27）。

- \* 11 安部「花押に見る最上氏の領主としての性格」（前注（3））三五頁。

- \* 12 上島有『中世花押の謎を解く 足利將軍家とその花押』（前注（1））二九八頁。

- \* 13 上島有『中世花押の謎を解く 足利將軍家とその花押』（前注（1））二九四頁。



- ・14 松尾『家康に天下を獲らせた男 最上義光』△前注(5)△V五四・五五頁。
- ・15 松尾『家康に天下を獲らせた男 最上義光』△前注(5)△V五三・五四頁。
- ・16 安部「花押に見る最上氏の領主としての性格」△前注(3)△V二九頁。足利義昭の花押については蕪木宏幸「足利義昭の研究序説―義昭の花押を中心に」『書状研究』一六、二〇〇三、上島有「中世花押の謎を解く 足利將軍家とその花押」△前注(1)△V参照。
- ・17 足利氏、とりわけ義輝、義昭の花押については上島「中世花押の謎を解く 足利將軍家とその花押」△前注(1)△V二六四頁などを参照した。
- ・18『古川市史七・資料Ⅱ、古代・中世・近世Ⅰ』(古川市、二〇〇二)、一五四頁。『横手市史史料編古代・中世』(横手市、二〇〇六)四一七頁。本文書の原史料を二〇一九年五月に見ることができ、校訂を行った。
- ・19 本中山城については保角里志「谷木沢楯跡と中山玄蕃」(『羽陽文化』一六三、二〇一九)参照。
- ・20 安部「花押に見る最上氏の領主としての性格」△前注(3)△V三二頁。
- ・21 鮭延秀綱がいつ最上義光の軍門に降ったかについては異論があるが、主要な学説は天正九(一五八二)年説 栗野俊之「最上義光」(日本史料研究会、二〇一七)と天正一三年説(保角里志「南奥羽の戦国を読む」高志書院、二〇二一、七八頁)であり、いずれも天正九年以降とする。本稿ではひとまず栗野説に従って天正九年説に立つが、今後の議論を待ちたい。
- ・22『性山公治家記録卷四』五五九頁、天正一〇年四月一八日条。
- ・23『山形市史』△前注(2)△V二八八頁、『能代市史古代・中世編』一の口絵。
- ・24『寒河江市史 大江氏ならびに関係史料』(寒河江市、二〇〇二)一〇一頁。『安中坊系図』に関しては、資料批判がなされていないが、白岩八郎四郎廣隆が天正五(一五七七)年に死亡したとするのは間違いであろう。
- ・25 安部「花押に見る最上氏の領主としての性格」△前注(3)△V三三頁。
- ・26 栗野「最上義光」△前注(21)△V一三八頁。菅原義勝「東禪寺氏永考」『山形県地域史研究39』(山形県地域史研究協議会、二〇一四)なども参照。
- ・27 たとえば『横手市史史料編古代・中世』△前注(18)△V四一八・四一九頁。
- ・28「砂金文書」『山形県史上』△前注(7)△V五二八頁、写真は『山形県史上』の口絵三頁、『仙台市史』一(別冊)など参照。
- ・29『錫田家文書』『古川市史七、資料Ⅱ、古代・中世・近世Ⅰ』△前注(18)△V一五六頁。
- ・30 ただ、A2型の版刻花押のようであり、天正期のものであろう。本文書についてはJ・F・モリス「仙台藩『錫田家文書』について」(『仙台郷土研究』一五巻一号(通巻二四〇号)一九九〇)を参照されたい。なお、令和元年八月二三日に原史料調査を行った。石田悦夫氏、高橋誠明氏、錫田茂登子氏のご協力を得た。
- ・31『山形県史上』△前注(7)△V二五八頁、『山形市史』△前注(2)△V二八七頁、柴辻俊六・千葉篤志編『史料集「萬葉莊文庫」所蔵文書』(日本史料研究会企画部、二〇一三)二八頁に写真と解説がある。
- ・32 安部「花押に見る最上氏の領主としての性格」△前注(3)△V三二頁。版刻花押であれば、他の版刻花押と比較すれば良いが、残念ながら原史料対校ができていない。
- ・33 安部「花押に見る最上氏の領主としての性格」△前注(3)△V三三頁。
- ・34 安部「花押に見る最上氏の領主としての性格」△前注(3)△V三三頁。
- ・35『山形県史上』△前注(7)△V九九三頁、『大日本史料』一一一三、五八頁。
- ・36『庄司喜与太氏所蔵文書』『山形県史上』△前注(7)△V一六九頁。
- ・37『山形県史上』△前注(7)△V二二五頁。
- ・38 安部「花押に見る最上氏の領主としての性格」△前注(3)△V三六頁。
- ・39 武田氏は、気品があり正文とする(『武田喜八郎著作集 卷1 山形県文化史の諸研究』△前注(2)△V一七八頁)が、花押は異なっている。おそらく写

山形大学紀要（人文科学）第十九卷第三号

であらう。

\* 40 武田「平清水家文書御用萬覺書日記」『山形市史編集資料一―号』（山形市史編集委員会、一九六八）一二・一三頁。

\* 41 『武田喜八郎著作集 卷1 山形県文化史の諸研究』△前注（2）▽一七八頁。

\* 42 『武田喜八郎著作集 卷1 山形県文化史の諸研究』△前注（2）▽一七九頁。

\* 43 「専称寺文書」『山形市史』一六二頁、写真は武田喜八郎氏所蔵である。

\* 44 『武田喜八郎著作集 卷1 山形県文化史の諸研究』△前注（2）▽二〇二頁。

\* 45 『武田喜八郎著作集 卷1 山形県文化史の諸研究』△前注（2）▽一八一頁。

\* 46 「年末詳一二月二八日付赤尾津豊前宛最上義光書状写」『山形市史』△前注（2）▽三三九頁。

\* 47 「年末詳一一月二二日付北館大学宛最上義光書状」（最上川土地改良区所蔵文書）。

付記

本稿作成に際しては、文書所有者を初め多くの方々のご教示ご協力を得た。とりわけ、片桐繁雄氏、武田喜八郎氏、北畠教爾氏、石田悦夫氏、秋保良氏、揚妻昭一郎氏、栗野俊之氏らには多くのご教示を得たことを記して、感謝の意を表したい。

最上義光文書表（花押が据えられた文書のみ）

no	年月日	文書名	差出人	受取人	料紙の形態	典拠・参照	花押形式
1	1570（永禄13）年 1月吉日	最上義光言上状	最上義光	立石寺	堅紙	立石寺文書・山形市史169	A1
2	1572（元亀3）年 3月17日	最上義光知行宛行状写	最上義光	萩生田弥五郎	堅紙	秋田藩家蔵文書・山形市史238	A2?
3	1579（天正7）年 8月28日	最上義光祈願状	最上義光	湯殿山	堅紙	山形県史上258・山形市史287	A2
4	1581（天正9）年 5月（梅）16日	最上義光書状写	最上義光	（砂越）也足軒	?	山形県史上361	A2?
5	1581（天正9）年 12月10日	最上義光書状写	最上義光	有路水主	?	山形県史上338	A2
6	1582（天正10）年 8月7日	最上義光書状	最上義光	大崎殿（義隆）	堅紙	横手市史史料編古代・中世417、古川市史7、154、安部俊治「花押に見る最上氏の領主としての性格」（伊藤清郎編『最上氏と出羽の歴史』）に花押の写真あり。	A2
7	1582（天正10）年 11月25日	最上義光書状	最上義光	下国（愛季）	堅紙	山形市史288、鶴岡市史上図版23	A2
8	1583（天正11）年 4月1日	最上義光書状写	最上義光	古口（秋穂飛驒）	?	山形県史上162、山形市史212、安部俊治「花押に見る最上氏の領主としての性格」（伊藤清郎編『最上氏と出羽の歴史』）に写真あり。	A2
9	1584（天正12）年 5月13日	最上義光書状	最上義光	高森（留守政景）	堅紙	砂金文書、山形県史上528、仙台市史1（別冊）	A2
10	1588（天正16）年 11月5日	最上義光書状	最上義光	鈴木能登守	?	山形県史上223	F
11	1590（天正18）年 7月4日	最上義光書状	最上義光	浅野（長政）	横折紙	山形県史上993、大日本史料12-13、581	A2
12	天正年中カ7月29日	最上義光書状	最上義光	?	堅紙	鶴田家文書・古川市史7、156、249	A2

最上義光花押再考

山形大学紀要（人文科学）第十九卷第三号

23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	no
1599 8月27日 (慶長4)年	年未詳 12月7日	1598 8月2日 (慶長3)年	1595 11月18日 (文禄4)年	1595 7月20日 (文禄4)年	1594 1月28日 (文禄3)年	1593 5月20日 (文禄2)年カ	1593 5月18日 (文禄2)年カ	1592 3月28日 (天正20)年カ	1591 8月12日 (天正19)年カ	1591 5月3日 (天正19)年カ	年月日
最上義光書状	最上義光書状写	最上義光掟書	最上義光制札写	織田常真、最上義光等30名連署起請文	最上義光知行宛行状	徳川家康等20名連署請文	最上義光書状写	最上義光書状	最上義光書状写	最上義光言上状	文書名
最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	織田常真、羽柴出羽侍徒など	最上義光	徳川家康、山県出羽侍徒ほか	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	差出人
志村伊豆・中山玄蕃	辻所左衛門	専称寺乗慶	鳥海・月山両所神?	宮部中務法印、民部卿法印、富田左近将監殿、増田右衛門尉殿、石田治部少輔殿、長束大蔵太輔殿	光明寺	豊臣秀吉	いらこ信濃	蔵増大膳亮	小介川治部少輔、仁賀保兵庫頭、滝沢又五郎、岩屋能登守、内超宮内少輔	?	受取人
続紙	?	堅紙	?	継紙	横折紙	継紙	継紙	切紙	?	横折紙	料紙の形態
常念寺文書・山形市史164	秋田藩家蔵文書・山形市史250	専称寺文書・山形市史162	山形県史下296	「大阪城天守閣所蔵文書」『ねねと木下家文書』79、153頁	光明寺文書・山形市史161、山形県史上211	上越市史別編2、685	伊達文書・山形市史270・271	立石寺文書・山形市史171	秋田藩家蔵文書43・114・山形市史249	庄司喜与太(大石田)氏所蔵文書、山形県史169、吉江氏旧蔵文書	典拠・参照
C1	C1	C1	F	B1	B2	B1	F	B1	B1	B1	花押形式

no	年月日	文書名	差出人	受取人	料紙の形態	典拠・参照	花押形式
36	1602 10月14日 (慶長7) 年カ	最上義光書状	最上義光	小国撰津守	横折紙	折原文書・山形市史176	C2
35	1602 7月25日 (慶長7) 年カ	最上義光書状写	最上義光	三坂越前守	?	新編会津風土記卷之七、108	?
34	1602 7月23日 (慶長7) 年	最上義光知行宛行状	最上義光	里見薩摩(景佐)	横折紙	東根市史里見家文書2	C2
33	1602 7月23日 (慶長7) 年	最上義光知行宛行状	最上義光	里見薩摩(景佐)	横折紙	東根市史里見家文書1	C2
32	1601 閏11月19日 (慶長6) 年カ	最上義光書状	最上義光	小幡播磨守(昌高)	横折紙	小幡文書、栗野俊之『最上義光』239頁、コ ピーは行田市小幡好則氏より提供された。	C2
31	1600 11月8日 (慶長5) 年カ	最上義光書状	最上義光	伊達政宗	折紙	伊達文書・山形市史182・183、大日本史 料12・13、581、山形県史上335・336、 「伊達文書」山形県史上625	C1
30	1600 10月22日 (慶長5) 年カ	最上義光書状	最上義光	伊上州(留守政景)	折紙	留守文書・山形市史274、山形県史上527	C1
29	1600 10月15日 (慶長5) 年カ	最上義光書状	最上義光	伊上野(留守政景)	折紙	留守文書・山形市史273	C1
28	1600 10月8日 (慶長5) 年カ	最上義光書状	最上義光	秋藤(秋田実季)	切紙	秋田家文書・山形市史272、横手市史史料編 古代・中世595、山形県史上1003・110 05	C1
27	1600 9月22日 (慶長5) 年カ	最上義光書状	最上義光	上野(留守政景)	堅紙	留守文書・山形市史273	C1
26	1600 8月20日 (慶長5) 年	最上義光起請文	最上義光	戸沢九郎五郎(政盛)	牛玉宝印	戸沢文書・山形市史184	C1
25	1600 7月21日 (慶長5) 年カ	最上義光書状	最上義光	小野寺遠江守(義道)	切紙	山形県史下583、横手市史史料編中世補遺2、 7頁	C1
24	1600 5月7日 (慶長5) 年カ	最上義光書状写	最上義光	仁賀保、赤津、滝沢	?	秋田藩家蔵文書・山形市史247・248	C1

山形大学紀要（人文科学）第十九卷第三号

50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	no
8月5日 1611 (慶長16) 年力	6月10日 1611 (慶長16) 年力	6月26日 1610 (慶長15) 年	2月18日 1609 (慶長14) 年	2月7日 1606 (慶長11) 年力	2月7日 1606 (慶長11) 年力	1月3日 1606 (慶長11) 年	閏8月2日 1604 (慶長9) 年	4月11日 1603 (慶長8) 年	3月27日 1603 (慶長8) 年力	3月27日 1603 (慶長8) 年力	3月27日 1603 (慶長8) 年力	3月27日 1603 (慶長8) 年力	3月18日 年未詳(慶長8年以後)	年月日
最上義光書状写	最上義光書状	最上義光知行宛行状写	最上義光感状	最上義光書状	最上義光書状	最上義光書状	最上義光書状	最上義光知行宛行状	最上義光書状写	最上義光書状写	最上義光書状写	最上義光書状写	最上義光書状	文書名
最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	最上義光	差出人
北館大学	北館大学・北館兵部少輔	平清水下野義行	平楽寺友衛門	志村伊豆、坂紀伊	東根薩摩(景佐)	志村伊豆、坂紀伊	豊臣秀吉	平清水下野	広川喜右衛門	田辺内記	佐藤喜兵衛	藤田守右衛門	?(稻荷)	受取人
	横折紙	縦紙	横折紙	横折紙	横折紙	横折紙	横折紙	横折紙	横折紙	横折紙	横折紙?	横折紙	横折紙	料紙の形態
「目の幸」、鶴岡市史上269	北館文書・山形市史234	平清水文書・山形市史174	最上義光歴史館所蔵写真	東根市史里見家文書4	東根市史里見家文書5	東根市史里見家文書3	最上川土地改良区所蔵文書	平清水文書・山形市史174	雞肋編所収文書(卷200)・山形市史213	石川文書・山形市史282	目の幸所収文書・山形県史上400	雞肋編所収文書(卷200)・山形市史214	曾根文書・山形市史168(宝幢寺文書・山形市史279)	典拠・参照
C2	C2	A2	B	C2	C2	C2	C2	A2	C2?	C2	C2	C2?	C2	花押形式

no	年月日	文書名	差出人	受取人	料紙の形態	典拠・参照	花押形式
51	1612 (慶長17) 年 7月2日	最上義光書状	最上義光	北館大学	横折紙	本間美術館文書・山形市史199、鶴岡市史上269	C2
52	1612 (慶長17) 年 8月15日	最上義光書状	最上義光	平清水下野	堅紙	平清水文書・山形市史174	A2
53	年未詳1月1日	最上義光書状	最上義光	野辺沢宮内	横折紙	光禪寺文書・山形市史161、山形県史上212	C2
54	年未詳1月11日	最上義光書状	最上義光	佐藤	?	室岡正雄氏所蔵文書・山形県史上221	F
55	年未詳2月24日	最上義光書状	最上義光	和田左衛門	?	雞肋編所収文書 (巻200)・山形市史214	F
56	年未詳5月3日	最上義光書状	最上義光	末吉屋兵衛	切紙	山形県史上581	B
57	年未詳5月25日	最上義光書状写	最上義光	山内膳正	?	山形県史上359・360	F
58	年未詳7月16日	最上義光書状写	最上義光	太和田近江	?	秋田藩家蔵文書・山形市史247	C2
59	年未詳8月14日	最上義光書状	最上義光	北楯大学 (利長)	横折紙	荻原満氏所蔵文書、山形県史上369	C2
60	年未詳9月29日	最上義光書状	最上義光	北楯大学利長	横折紙	最上川土地改良区所蔵文書	C1
61	年未詳10月5日	最上義光書状	最上義光	岩屋右兵衛	横折紙	秋田藩家蔵文書・山形市史242・243	C2
62	年未詳10月25日	最上義光書状	最上義光	岩谷 (屋力) 右兵衛	横折紙 (下裁断)	秋田藩家蔵文書・山形市史243	C2
63	年未詳11月21日	最上義光書状	最上義光	高橋藤三郎	切紙?	東大史料編纂所影写本高橋文書3071/23	C1
64	年未詳12月12日	最上義光書状	最上義光	専称寺	?	専称寺文書・山形市史163	F

〔注記〕花押型式欄のA～Fについては本文参照。典拠欄の山形市史169とは『山形市史料編1最上氏関係史料』（山形市、1973）169頁を指し他の資料集の場合も同じ。山形県史とは『山形県史古代中世史料1資料編15上』（山形県、1977）と『山形県史古代中世史料2資料編15下』（山形県、1979）のことである。鶴岡市史上とは『鶴岡市史資料編古代・中世史料上』（鶴岡市、2002）のことである。古川市史7とは『古川市史七、資料Ⅱ、古代・中世・近世1』（古川市、2001）、横手市史史料編古代・中世とは『横手市史史料編古代・中世』（横手市、2006）を指す。東根市史とは『東根市史編集資料8』（東根市、1980）を指す。



# A Reconsideration on Yoshiaki Mogami' s Signatures (kaō)

Kenji MATSUO

This paper aims to clarify the usage of the monograms of Yoshiaki Mogami(1546-1614), one of the daimyō during the Sengoku period in Dewa province, present day Yamagata and Akita prefectures. In this study, I discuss how Yoshiaki Mogami's signatures were used and the meaning of the changes of them.

According to my research, there are three different types (cited as type A,B,C) of Yoshiaki Mogami's autographical signatures.

In 1570, Yoshiaki Mogami began to use type A symbolizing the lineage of the Muromachi shogunate which was the main stream of Ashikaga clan. Mogami clan originated from Ashikaga clan. In 1590, Yoshiaki Mogami began to use type B symbolizing the landlord of Dewa, under the reign of Toyotoni Hideyoshi. Around 1595, he began to type C1 and in 1600 changed from type C1 to C2. The change from type B to C1 means that Yoshiaki Mogami became one of the members of Tokugawa Ieyasu's group. After Tokugawa Ieyasu became the ruler of Japan, Yoshiaki Mogami began to use type C2.

In conclusion, the changes of Yoshiaki Mogami's monograms closely connected with the changes of his stages.